

青雲の志 V

地区英語スピーチコンテスト

茉莉菜さん、県大会出場！

去る九月十六日土曜日、第69回高田宮林国頭地区英語スピーチコンテストが行われ本校からは三年生黒塚茉莉菜さん、二年生山城文花が出場しました。

茉莉菜さんはこれまで育ててくれたお母さんへの感謝、文花さんも言葉の大切さと家族への思いについての内容で二人とも家族の絆を感じさせる素敵な作品でした。そして超多忙な毎日の中で原稿を覚え何度も練習をくり返し、当日は見事なできばえでした。結果は文花さんが奨励賞で、茉莉菜さんが3位入賞することができました。茉莉菜さんは十月七日に浦添市の県大会へ派遣されます。県大会では、堂々と「自分らしさ」「思い」をスピーチに込めて下さい。健闘を祈ります。



<2学期の抱負/始業式>

3年生代表 親川友星

皆さん、夏休みはどのように過ごしましたか？陸上、部活、宿題で忙しかったと思います。今日からは長い2学期が始まります。3年生は修学旅行など楽しみな行事があります。普段の学校生活から集団行動を意識し、修学旅行につなげていきたいです。また、合唱コンクール、地区陸上、地区駅伝など、国中の団結力を深める行事もあります。3年生にとりして、国中の顔として、生徒会の一員として国中を引っ張っていきたくたいです。そして3年生は受験が控えています。オープンスクールなどにも積極的に参加し全員が進路を決定できるようにしたいです。そして日頃から学び合いをし、互いに合格できるよう頑張っていきたいです。

国頭中学校
 国頭村字辺土名 1463
 Tel 41-2205
 Fax 41-3071
 発行 校長 島袋賢雄

9月24日 清掃の日!

1971(昭和46)年の9月24日に「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」が施行されました。学校を生徒が自分たちで清掃するのは当たり前です。しかし、海外ではそうではありません。では、なぜ日本では生徒が清掃するのでしょうか。そこには「自分たちが生活する空間は自分たちできれいにする」という日本人の価値観があるのでしょう。以前、サッカーのワールドカップで日本人サポーターが自分たちの応援席を自分たちで掃除しました。そして、海外から広く賞讃を受けました。掃除の心、大事にしたいものです。

戦跡を訪れ教訓伝えよ

新城俊昭 沖縄大客員教授

戦跡は、戦争で亡くなった人々を追悼し、悲惨な状況を二度と起こさない誓いと教訓の場だ。しかし、「肝試し」というのは、この戦跡の意義が少し薄れてきているようだ。

戦後70年を超え、若者たちの周囲に戦争体験者が少なくなっていることも背景の一つだと思う。県内高校生の沖縄戦に関する意識を調べるためのアンケートを行っている。戦後70年に行ったアンケートでは「周囲に沖縄戦を語ってくれる人はいるか」との設問で、「いない」と答えた人の数が「いる」とした人の数を初めて上回った。今後、ますます戦争体験者が少なくなっていく中で、戦争を感じられるような平和教育には戦跡の活用が鍵だ。

しかし、県外に比べ、県内の学校では戦跡に行くことが少なくなっている。チビチリガマは、自ら子どもを殺すようなあり得ないことが起こった。戦争を絶対に起こしてはいけないという教訓の場だ。こうした戦跡の意義を子どもたちに感じてもらえるよう、地域や学校の平和学習の場で戦跡を訪れ、伝えていくことが重要だ。

あまりにも悲しい事件 少年によるチビチリガマ流し!

太平洋戦争末期の沖縄戦で住民83人が集団自決に追い込まれた読谷村の「チビチリガマ」で、今月、千羽鶴が引きちぎられたり、遺品が壊されたりしているのが見つかり、沖縄本島中部に住む16歳から19歳の少年4人が器物損壊の疑いで逮捕されるという悲しい事件が起きました。逮捕された少年のほとんどが「悪ふざけだった」としたうえで、このガマをめぐる歴史について「詳しく知らなかった」と供述しているようです。

戦後72年目を迎えた今日、この事件を教訓として、改めて教育現場において、命の尊さや沖縄戦の体験の継承を含め「平和教育」のあり方を問い直すなければいけないと痛感しました。

この事件を受け、17日の琉球新報に特集記事として県内識者お一方の見解が掲載されていましたので紹介します。

規範学へは更生の可能性

上間陽子 琉球大教授

社会に孤立した子どもたちは、同世代集団だけの力学で動く。お互いに虚勢を張って後に引けなくなり、破壊行為に至ってしまうことはある。規範がなければ暴力にはストップパーがなく、どこまでもいく。さまざま少年事件で起きている傾向だ。

「やってはいけない」という感覚や規範は、親世代から伝わる。大人のコミュニケーションがしっかりしていて、子どもたちとつながっている中で、子どもたちは「これをやったらたくさんのお金が悲しむ」というような規範を学ぶ。

このような犯行に及んだのは、彼らのコミュニケーションが分断されていて、暴力的なものではないかと推察される。ただ、情報提供によって逮捕にいたったというのは「このままではいけない」と思っている警察に知らせた人がいるということだ。少年たちに更生の可能性はある。

彼らはチビチリガマで起きたことをきちんとわからず、犯行に及んでしまったのではないか。彼らこそ、チビチリガマで亡くなった85人の一人一人のことを伝えなくてはならない。